

展示リニューアルにおける試み

～リニューアルを学芸員ネットワークで共有する～

橿原市昆虫館 資料学芸係 日比伸子

●はじめに ～橿原市昆虫館の概容～

橿原市昆虫館（以下「昆虫館」）は、奈良県のほぼ中央、大和盆地周辺部ののどかな田園地帯に、1989年10月に開館した。すぐ側には国の名勝・大和三山の一つ「天の香久山」、さらに、高松塚古墳等で有名な明日香村に隣接する古のロマン漂う立地である。

展示室は、第1・第2・生態展示室の常設展示と、特別展等を行う二階展示室、一番人気の沖縄地方の蝶が舞う500㎡の温室（図1）等で構成される。私は開館半年後に就職したのだが、年を追う毎に、多様な資料の収蔵場所の不足や常設展示のマンネリ化、施設や設備の老朽化等の問題を抱えるようになった。

そして開館20周年を迎えた2009年12月1日よりリニューアル工事を実施し、2010年5月1日に本館部分をプレオープン（図2）、同年6月1日に新館も合わせグランドオープンとなった。

昆虫館や橿原市にとっては二十年に一度の一大事であり、私たち学芸員にとっては初めての体験である。リニューアルは今後の昆虫館像をイメージ付けるものであり、幅広い利用者の声や地域の要望、昆虫館を支えるサポーターの思い、専門家のアドバイス等を取り入れ、多彩な情報や多様な価値観から一つの昆虫館像を作り上げていかななくてはならない。一方、地方の小さな博物館に勤める学芸員にとって、このような常設展示更新を体験できるのは、恐らく一生に一回のこと。期待よりも不安や重責の方が大きく、何もかもが手探りの一年となった。



図1 橿原市昆虫館温室外観



図2 2010年5月プレオープンセレモニー

●リニューアルに至る経緯

昆虫館では開館10年目に展示更新を検討し、見積りを徴して要望したが適わなかった。その後、何度もリニューアルの要望をあげたが予算化されることはなかった。開館当初より昆虫館は公社管轄だったが、2002年に教育委員会に移管し、奈良県で唯一の自然史系博物館として博物館登録された。その後、2005年に橿原市議会にて改修の必要性が議論され、2007年にリニューアル基本構想が作成され、同年現市長が就任した。そこで、2008年に再度内容を検討したところ、国の「まちづくり交付金」の補助により新館施工等の見込みが立ち、さらに常設展示についても、市長判断によりリニューアルが決定した。そして、2009年12月から開館以来初の長期休館に入り、総事業費3億円弱、うち展示部分の更新には7000万円余をかけてのリニューアル工事が始まった(図3・4)。



図3 イメージパース・第1展示室



図4 イメージパース・第2展示室

●リニューアルワークショップ第一弾(RWS1)の実施

昆虫館の日常業務では、学術的にも展示技術の面でも体験に限られ、得られる情報も偏りがちだ。しかし展示更新においては、新しい知見や正しい情報を収集し、広い視野にたつて「橿原市昆虫館らしさ」を表現することが重要である。私たちは、少しでも多くの情報や知恵を得たいという思いと、リニューアルという滅多にない機会を博物館関係者で共有すると共に、その経過を記録に残す必要性を感じ、休館に入った2009年12月21日に『展示リニューアルに関するワークショップ(以下RWS1)』を、NPO西日本自然史系博物館ネットワークとの共催、展示制作担当(株)ムラヤマの協力で開催した。

おそらく、展示更新を題材として開催したRWSは、全国的にも初めてのケースでないかと思う。募集前はどのくらいの方が集まって下さるか不安だったが、当日は関東から九州まで学芸員や展示制作者、友の会やボランティア等博物館の利用者、計60名もの参加者が集まり、4時

間以上にわたり白熱した議論が展開された。既に展示室での工事が始まっていたため、RWS1の本会場は駅前のホールを借りた(図5)。趣旨説明後、リニューアル概要を昆虫館長補佐から、展示更新の技術提案について展示業者から話題提供し、バスで昆虫館に移動して実地見学を行い(図6・7)、再度、本会場に戻ってコメントや質疑応答を展開した。

「組板の上の鯉」になる私たちとしては、展示の大まかな計画が決まった段階でのRWS1で、いったいどのような意見が聴けるのか、正直なところ心配もあった。しかし、実際に開催してみると、広い地域から多分野の参加者が集まり、予想以上に幅広く奥深い意見が多数得られた。リニューアルの最中にあり目先の事ばかりに囚われていた私にとって、今一度広い視野に立つことや、初心に戻り優先すべきことを問い直す必要性に気付かされた。具体的には、導入部のイメージや重要性、休憩スペースの取り方、学芸員が活用できる展示スペースの有効性、展示物のメンテナンスの利便性等… 実際にその後の展示制作で採用された意見も多かった。また、RWS1の参加者とは展示更新の話がしやすくなり、その後共通認識に立って、相談事や資料提供をお願い出来る利点も生まれた。

展示業者側も博物館や学芸員の真の要望や気持ちを知って驚くことも多かったようで、RWS1を機に、昆虫館では学芸員、展示業者、サポーターの距離が縮まり、本音で話し合える部分が増えた。リニューアル後も、展示物に関する疑問等について展示業者と率直に議論を重ね、職員で直せる展示物は自分たちで改善し、来館者アンケートに対応する工夫を実践できたのはRWS1の成果である。そして、RWS1の報告書は私にとって大切な参考書となっている。



図5 RWS1・総合討論



図6 RWS1
新館建築現場の見学



図7 RWS1
展示パネルデザインの説明

●リニューアル工事の経過と概要

今回のリニューアルでは、温室から渡り廊下で繋がる新館が増築された(図9)。新館1階にはボランティア室(図12)や研究室、第二収蔵庫(図13)等が配置された裏方があり、2階は来館者スペースとして、特別生態展示室や情報カウンター(図10)、研修室2を新設した。本館と新館を結ぶ渡り廊下にも展示レールを設置し、企画展示を展開している(現在は「ゾウとムシの絵展」)。

既存の本館の改修では、まず玄関前に多目的広場として、雨でもゆっくり寛げるテントを新設した（図8）。1階ロビーでは事務所や受付カウンター等を開放的に改修し、授乳・救護室を新たに設置した。中二階にあった研究室と標本作成室は新館に移設され、代わりに80名が収容できる研修室1に変身した（図11）。

常設展示については、生体展示を除く1階部分（第1・第2展示室、生態展示室一部）を更新した。今回の展示は「見て、聞いて、さわって、感じる昆虫館」をテーマに、子ども目線で、五感を使って楽しみながら自然への興味を喚起する「体験と学習の場」をイメージして計画された（図3・4）。

いよいよ展示制作が始まると、100枚を超える展示パネル、映像、模型、昆虫等の標本類（ドイツ箱約50箱分）を製作することとなった。時間に追われる中、展示業者と打合せを重ね、展示の内容やレイアウトを検討し、原稿を書き、写真や標本等を探し集めていく作業が延々と続く。自前の収蔵資料だけでは足りないため、写真撮影に走ったり、飼育室で録音したり、他の博物館や研究施設に提供して頂いたり… これらの作業は特別展等で多少の経験はあるものの規模が大きく、内容や手法も多岐にわたるため、企画・設計・グラフィック・造形・メカ・映像や音響等の専門家と連携しなくては成し得るものでない。私のような学芸員では経験も知恵も不足していて、展示業者の提案と知識に頼らざるを得ず、不安や迷いは絶えることなく、限られた時間の中で焦りだけが先行した。その中で、RWS1で得られた貴重なアドバイスや学芸員たちからの情報提供は本当に心強く、前へ進む活力を与えてくれた。

こうして昆虫館では、リニューアル工事が一段落した2010年5月に本館部分のみをプレオープンし、6月に新館も含め改めて全館をグランドオープンした。



図8 玄関前多目的広場



図9 新館外観



図10 情報カウンター（新館2階）



図11 研修室1（本館中2階）



図12 ボランティア室（新館1階）



図13 第二収蔵庫（新館1階）

●リニューアル展示の概容

新しい展示について、全てをお伝えすることはできないが、少しご紹介したい。玄関ロビーから第1展示室へ歩みを進めると、センサーで感知し変化する「ようこそ！昆虫館へ」の映像サインが来館者を招き入れる。次いで「生き物タイムトンネル」をくぐりながら、生命の誕生や昆虫の進化を紹介する（図14）。傍らの「化石ウォール」には化石が埋め込まれ、本物に触れつつ地球の歴史を体感できるようになっている。奥には進化上の昆虫大爆発をイメージした巨大グラフィックや模型、音声（虫の声や羽音）、標本で彩られた「地球は虫の惑星」が登場する。この辺りは一押しの記念撮影ポイントだ。

第2展示室では、「昆虫って何？」という疑問に、様々な分野からアプローチする（図17）。顕微鏡で蝶の翅等が観察できる「昆虫ラボ」（図16）、ミズスマシの視界体験、フェロモンの匂い体験、最新昆虫ロボットの展示等、「見て、聞いて、匂って、さわって」体全体で感じながら、昆虫の科学最前線についても紹介している。

生態展示室では、大和盆地の里山を再現したオープンジオラマを設置し（図15）、手を差し

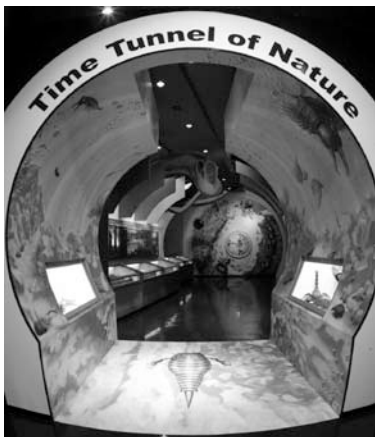


図14 第1展示室入口から



図15 生態展示室オープンジオラマ



図16 第2展示室・昆虫ラボ



図17 第2展示室全景

出すと虫の映像が掌にのって動き出す「てのりぼっぷ」の不思議な体験や、のぞき窓展示、「檜原の夜の世界」等、自ら探して観察する展示展開を試みた。カブトムシやクワガタムシ、水生昆虫等の生体展示については従来通りの展示ケースだが、職員の創意工夫で少しずつ改良している。

●リニューアルワークショップ第二弾（RWS2）の開催

RWS1 開催後、リニューアルオープン後に再度WSを開催してほしいという要望が多数寄せられた。確かに、私たちにとってリニューアルオープンは見かけの展示完成に過ぎず、実際には、その後の展示運用や改善が大事だと思い、展示リニューアルの目標の一つとして、RWS2に取り組みたいと考えた。

リニューアルオープンしてほぼ半年がたった2010年11月15日に「リニューアルワークショップ【事後検討編】（以下RWS2）」が開催された（NPO西日本自然史系博物館ネットワーク・檜原市昆虫館主催、株ムラヤマ協力）。参加者は50名を超え、半数以上がRWS1参加者だった。午前中にアンケートを書きながら館内を自由に見学して頂き、午後よりWSを開始した（図20）。研修室にて趣旨説明の後、リニューアルの概容と、展示更新後の改善点と課題、リニューアル後の昆虫館の新たな取組等について、昆虫館から話題提供した（図18）。次いで、展示製作の株ムラヤマから展示概容を説明頂き、館内に分散して現場説明や情報交換を行った（図19）。

RWS1では昆虫館と本会場が離れていて移動時間がかかり、議論が深められなかった反省点があった。特に参加者が多いと全員が発言することは不可能だ。折角の機会なので、今回はグループディスカッションを取り入れることにした。RWS1では、博物館における「展示」の課題について様々な要素が挙げられていた。ターゲットや展開方法等の展示コンセプトに関すること、最新情報や学術的な背景、展示技術や道具、補助ツールの作成や生態展示との連携等のインタープリテーション、展示物の維持・管理、宣伝や普及啓発に関する視点等…そこで、RWS2では下記の7つのテーマを設定した。

- ① RWS1以降の展示リニューアルにおける対応の検証と今後の活用
- ② ハンズオン展示物等の修理や今後の維持・管理
- ③ インタープリテーションと展示（教育普及ツール等）
- ④ 学校団体等の見学時の取り組み（テーマの設定・ツール等）
- ⑤ 生態展示（温室のチョウ等）と常設展示との関連づけや活用
- ⑥ 運営上の問題点（スタッフ不足等）と解決への糸口
- ⑦ 裾野を広げるための館外への発信や広報

数名ずつのグループに分かれ、約1時間意見交換したが、時間が足りなかったようである。

その後、再び全員が集まって各班からの報告と総合討論を約1時間半行い、RWS2は延べ4時間半以上に及んだ。昆虫の専門家のみならず動物、植物、水族、人文系、科学系、展示製作、ボランティアや友の会関係者等、参加者は多様で、普段出会わない異分野の方と自由に情報交

換が出来た。何よりリニューアルした現物が目の前にあるので、具体的かつ現実的な問題が一つ提起されると、それぞれ自館の例等をひきだして、アイデアを出し合っていく。

午前中に実施したアンケートでは、展示計画の妥当性や展示物の評価に関する厳しい意見も多かったが、午後のRWS2では現状を認識した上で、今後、これらの展示物をいかに活用するか、更なる改善の可能性を探ろうという視点からの意見交換が行われた。つまり、参加者自身が自分なら今後どうするか試行錯誤したのだ。そのため答えは出なかったかもしれない。だが、昆虫館の展示を観て考え、助言すると同時に、自らの問題として真剣に取り組み、具体的なシミュレーションとしてそれぞれの職場へ持ち帰って貰えたと思う。

RWS2では、午前中の展示見学時に記入したアンケート、話題提供やグループディスカッション・総合討論の記録、直後のアンケートのほかに、半数以上の方から後日メール等で関連な意見や感想を頂いた。現在この膨大なデータを報告書にまとめつつ、これらの貴重な資料は、榎原市昆虫館のRWSの一番の宝物であると実感している。



図 18 RWS2・研修室 1 にて

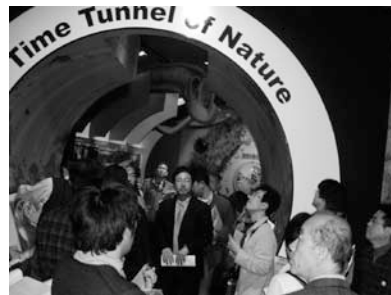


図 19 RWS2・展示見学
(第 1 展示室)



図 20 RWS2・意見交換
(第 2 展示室)

●おわりに

榎原市昆虫館における展示リニューアルの効果はどうだったのか？ リニューアルオープン後の入館者数は前年比約 1.2 倍で、2010 年 10 月には開館当初から 200 万人目の来館者を迎えた。観覧料の値上げ（2010 年 6 月）等を考えると、数字上の効果はあったと考えてよいだろう。

リニューアル工事自体は終わったが、展示物はただ置いておけば良いものではない。今後、展示を効果的、魅力的、かつ安全に活用し、昆虫館スタッフやボランティアが普及啓発を展開することが必要である。さらに「榎原市昆虫館らしい」要素を取り入れ、学芸員独自の活動を発信することも重要だ。展示を如何に活かし、運営しつつ改善して、そして、どうやって伝えていくのか、これからは学芸員にとっての真の博物館活動でもある。

二回の RWS では、予想以上に大きな成果が得られた。博物館の展示づくりやその活用については、現場での研究機会や情報共有が少なく、学芸員にとっての共通課題といえる。今後、各博物館での事例等からお互いに学ぶ横断的な取組みや、学芸員をバックアップするしくみづくりが進むことを願う。これらは博物館が提供する展示の質を高め、展示に関する博物館相互の新しい連携を産み出すに違いない。